
サザンテラスで夕焼けを。

住友優大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サザンテラスで夕焼けを。

【Nコード】

N9775C

【作者名】

住友優大

【あらすじ】

東京の大企業を舞台にある一人の新人社員の生活を描く。生きるとは、愛するとは・・・？人間内面を追求していく1話完結小説です。

（前書き）

ある意味で未完成な作品であり、仮掲載です。不慣れなので表記等に誤植があるかもしれません。気がつき次第再編集していきたいと思います。また、地名や公共交通機関を中心に現実のものを使用しています。

この作品はフィクションであり、その企業等とは一切かわりありませんのでその点にご留意ください。

1、「入社前夜」

マンションの窓から見る外は、もうすっかり暗い。3月も今日で終わりだというのに外の風は肌寒い。

明日着ていくスーツを眺めつつ、キッチンで夕食を作る。

明日は斉藤商事の入社式である。

近年の高いインフレとそこを突き始めた原油の爆発的な高騰、そして各国の戦略的備蓄のための買占め。

そんなこんなで、加工貿易が主体の日本経済に大きな影響を与え、経済界全体で不景気が続いている。

巨大企業はどこも新規採用人数を絞ってきている。その影響が、入社試験の倍率は約20倍だったし、面接は5次にもおよんだ。

日本有数いや世界に名をとどろかす大手商社であっても景気の影響を露骨に受けている。

しかしながら、その会社の一員に明日からなるのだ。しかも管理職候補生の一種採用枠新卒採用者として。

やはり東大の法学部卒となるとはじめから幹部候補での採用である。ワイドショーや週刊誌で騒がれているほど、学歴社会は廃れていないし、受験生だけでなく会社の人事部にも一層のブランド校志向が強まっている。

やはり、学歴は社会では邪魔にならない。

鍋にかけていた火を消して、テレビをつける。高沢総理が首相官邸で記者会見を行っている。

去年の衆議院総選挙は、消費税の値上げを政策とした人民党は大敗。

厚生党が人民党（与党）グループから離れたせいもあり、野党第一

党の日本平和党が政権を担うことになった。厚生党との連立もわざわざされているらしい。

めまぐるしく変わる、そんな政治。55年体制は一体どこに行ってしまったのだろうか。

日本も今後はイギリスやアメリカのように野党と与党の立場が比較的逆転しやすいような、二大政党制になるのであろうか。

大企業ならどこでもそうだと思うが、斉藤商事ももちろん国会議員との「太いつながり」があるとのことを担当者の人から

あらかじめの新卒者対象のオリエンテーションで聞かされている。

今年からは霞ヶ関に行く機会もあるのかもしれないが、こう政治権力の遷移が目まぐるしいと接待も状況判断も難しくなりそうで、大変そうだ。

期待と不安が胸をジェットコースターのように高速でくねくね曲がりながら、時に急加速・減速を繰り返しながら過ぎ去っていく。

こんな 気持ちは高校から大学へと進む時・・・以来だと思う。食事をしながら、明日の経路をもう一度チェックする。このマンションがあるのは豊洲。そこから地下鉄を乗り継ぎ新宿に向かう。会社は新宿駅から徒歩3分ほどだ。出る出口はサザンテラス口。

「よし。」

なんとなく落ち着かないが、そわそわしていても仕方がない。

ご飯を味噌汁で流し込み、食器を水に漬け、いつもと同じように風呂に入る。

湯船につかっていると、いつの間にか周りが水蒸気で真っ白になってしまっていた。

タオルで体を拭いていると少しゾクつとする。

入社早々にいきなり体調を崩してはいけないと思い、引出しから市販の風邪薬を取り出し、やかんに残っていた水で飲んですぐにベッドにもぐりこんだ。

2、「研修の日々」

桜の花がとつくに落ち、歩道の木々には新緑が芽吹き強くなりつつある日差しを遮り、爽やかな風を醸し出す。

地下鉄を使つての通勤もだいぶ慣れてきた。満員電車もさほどのストレスは感じられない。一緒に管理職向けの研修を受けているのは同期6名で、

連日社内部署の案内や業務内容、社員としての心得等を学ぶ。本社（新宿）のビルは30F建てだから迷うと大変である。

昼食は9Fの社員食堂でとる。味はまあまあだが値段は安い。もちろんそこを利用するのは我々のような新人と平社員だけで、そ課長以上の幹部・重役連中はタクシーを飛ばして昼から赤坂・神田などに出かけ、政治家の接待に余念がない。午後からは各課の係長クラスの人の話を聞き、より専門的で実践的な知識を教えられる。

ここ一ヶ月で営業部・総務部・人事部・技術部・広告部・国際部の全ての研修を受け終わった。

そして今日は最後の研修。秘書室の見学である。これはおまけのような研修で、実質的な作業や先輩社員の講演はない。

重役室と社長室からの眺めをゆつくり拝み、17時定時の退社と相成った。

明日は休日ということも手伝つて夜は同期で打ち上げを行うこととなり、田辺や春山、松川や榊原・・・有志一同を揃えて大宮の居酒屋にて行う予定だ。

あらかた日が落ち、闇が迫る。新宿駅の13番ホームから川越行きの埼京線に乗り込む。大宮までは30分そこそこだ。

埼玉に住んでいる連中が多いから大宮になったのだが、豊洲に住む僕にとっては不便極まりない。まあ早めに切り上げるのが賢明とい

ったところであろうか。

「乾杯。」

新入社員の若さのかけらも見られないような盛り上がりには欠けた調子で宴は始まった。

酒もほどほど、料理もほどほど・・・。

当初の心配をよそに、結局エリート集団の集まりだからたいした盛り上がりもなく2次会もなしで、おとなしく21時にはお開きとなった。

大宮から東北線で上野に。そこから山手線で有楽町へ出て、地下鉄有楽町線に乗り込み自宅へ向かう。

来週の月曜日にはついに人事が発表され、配属になる部署が決まる。

さあ果たしてどんな仕事が行っているのか。全く予想がつかない。

ただ、本社勤務が良いと人事担当の先輩に言って置いたから、東京の外での仕事はよほどのことがない限りないと思う。

「まるで地下鉄だな。」

トンネルの中を期待と不安と・・・さまざまな気持ちに乗せ、ライト頼りで走っていく。

3、「企画室主任補佐」

昨日はそこで帰宅し、恐れていた二日酔いもなく久しぶりに気の軽い休日となった。この土日が正式配属前の最後の休暇となるであろう。

配属先は月曜日には1Fのロビーに張り出されることになっている。マンションの部屋の窓の外からは、海が見える。

窓を開けると心地よいがものすごく強い風が部屋いっぱいに吹き込んでくる。僕は風がすきだ。風にあたるのがとてもすきだ。

無言で何かを運んでくれる、そんな色のない風が。

今日は特にすることは無いし、友人との予定も入っていない。何をしようかと考えるうちにふと思いついた。

この部屋にはパソコンがない。秋葉原にでも行って買おう。

急いで洋服を着替え、地下鉄に乗り込み有楽町にでる。ホームでは山手線より先に来た京浜東北線で秋葉原へ。

電気街は相変わらずにぎわっているようだ。適当な量販店を2・3軒回り一番安い場所で目当てのパソコンを購入。

最新のOSが入っていて、スペックもまあまあだ。

その後は歩いて神田の古本屋街に繰り出して通勤途中に読めそうな小説を数冊購入し、東京駅前の高層ビルで昼食。

初めてはいった、信州そばの店だがなかなかおいしかった。

散歩気分で隣のビルにある丸善丸の内本店で新書の文庫とパソコン関係の本を数冊購入し、大丸の地下街で食材とシャンパンを買う。今日の買い物の支払いは全てクレジットカードである。これは会社の社員専用の優待カードで大丸などの大手デパートなら全て10パーセントの値引きで購入できる。

そして、来た時と同じように地下鉄で帰宅。

マンションに着くと台所に荷物を置き、料理に取り掛かる。テーブルをセツト。もちろんお客などいないから、一人分ではあるけれども。シャンパンは冷蔵庫ではなく氷で冷やす。

午後9時。東京湾の夜景はきれいだ。シャンパンを飲みつつ改めてそう思う。いろんな思い出がよみがえる。大学時代の友人との旅行や、

高校時代の文化祭、中学のときの学年劇、小学校のときの今想えば壮大なドラマ。

全てを踏まえた上での現在。シャンパンのようにどこか甘く、ほ

る苦く泡のように消えていくそんな経験。

さあそろそろ片付けて、シャワーでも浴びて寝よう。

明日はせっかくの休暇を活かして、新幹線で大阪の友人を訪ねることになっている。ネットでひかり号の予約をとる。東京8時36分発。小田原停車のひかり365号で。

新幹線車内。左に見える駿河湾を眺めながらふと思った。

「幸せって何だろう。」

心が落ち着くことだろうか。

じゃあ「生きるって何だろう。」

ただ単に生命を維持することではないだろう。

あの時の記憶がよみがえる。その出来事が心の動きを金縛りにしている。

忘れよう。そう思って10年近くになるが、当時より鮮明な記憶になってしまっているような気がする。

沈んで来た気分を持ち直すため、東京駅で買ってきた、鰯の押し寿司の包みを広げた。

醤油のふたを開けたところで、名古屋の駅に停車。新大阪まではあと1時間程度か・・・。

月曜日の朝。

会社に出社する。昨夜は深夜に帰宅したため、あまりよく眠れなかった。

配属はどうなっているのだろう。

受付の隣のホワイトボードに人事の張り紙が出されている。

自分の名前を探す。

………あつた。

「本社企画室 主任補佐 陣内 康文」

覚悟はしていたが、いきなりの抜擢である。

希望通りの本社配属の嬉しさより、これからどんな困難・苦勞があるだろうという不安の方が頭によぎった。

明るい希望の光を、一瞬だけ暗い影が傍に近寄ってきて支配したような気がした。そんな月曜日の朝であつた。

4、「残業の日々」

一通りの仕事内容をようやく覚え、日々の仕事にもだいぶ慣れてきた。外は梅雨の灰色の空模様。

早くも6月半ば。じめじめとした重たい空気が新宿のビル街を支配している。

僕が配属された企画室は超多忙である。

何しろこれだけ大きな会社の企画・開発の審査・内容審議等を扱うのだから、会議等も分刻みのスケジュールである。

残業ももちろん日常茶飯事で、それが無い日などない。

また、企画は部門に関係なく舞い込んでくるので、その企画を扱う担当部署並の専門知識はいるし、

法令、資格、など行政書士的な知識もふんだんに必要とした。

しかも、陣内はまだ入社一年目の新人の主任補佐ということで、勉強・研修を兼ねて、

可能な限り全てのプロジェクト会議に出ているからまさに鬼のような仕事量であり、ここのところ足もとが不意にふらつく。

しかし、まだ陣内は幸せなほうかもしれない。
同期で国際営業部に配属となった田中と春山は
早くも支店長補佐としてドイツ：ベルリン・中国：上海にそれぞれ
飛ばされたし、

国内営業部に配属された松川と榊原は一日に山手線を何周もするほどの外回りの連続でもっと多忙な生活になっていることだろう。

日によって多少は違うが、企画室の残業は大体日付が変わるころに終わる。

よって帰宅するのは毎日深夜1時ぐらいである。

幸い、会社からタクシー代（幹部および準幹部のみ）が支給されるので終電で酔っ払いに絡まれるとか、
そのような深夜ならではの不愉快な事件には遭遇していないが、慢性的な疲れと睡眠不足に悩まされていた。

それでも企画の仕事に熱意を持つてすることができたのは、
陣内の教育担当で企画室の主任の重田さんの存在が何より大きい。

重田さんは40歳半ばで家族もちだが、疲れ一つ見せずに毎日の仕事を完璧、軽やかにこなしているすさまじい仕事の猛者だ。

また、重田さんは同じ東大の法学部卒で共有することのできる話題も多い。

そんな上司に教わることはどれも感心、感動、驚き、啞然、驚愕の連続で休む暇すら与えない。

しかし、プライベートでは心優しい人で陣内にとって理想の上司だった。

ある日の残業の帰り。いつも通り仕事を終え、新宿駅手前の甲州街道で運よくタクシーを拾った。

運転手に豊洲と行き先を告げ、座席に座るやいなや早速、ノートパソコンを開き今日の会議の復習をする。

車は深夜のためか速度をぐんぐんあげているようだ。外の景色が線

になって流れていく。

東京の夜景。その日は、タクシーがいつも通る首都高速の都心環状線が事故で通行止めなのでたまたま違うルートを走っていた。

「きれいだなあ。」

デスクトップから少しばかり目を離し、外の景色を見た左前方には東京タワーが見えてきた。

「東京タワー」 中学時代にそんなドラマやっていたなあ。

あのころは失恋に嘆いていたのだった？ それをきっかけに中学校時代の思い出がふとよみがえってきた。

そのころのいざこざや、悩みなどは今となっては思想が若すぎて思いたすのも恥ずかしいほどのものであるが、懐かしさがこみあげてくる。

今頃みんなどうしているのだろう。

同窓会は本当にやるのだろうか。

外の景色に目を戻すと、タクシーは有明ジャンクションから首都高湾岸線千葉方面に入るところだった。

5、「一本の電話」

6月も下旬になり、梅雨前線もそろそろ力をなくして季節が夏に向かおうとしている。

そんなある日の日曜日。

今日は久しぶりに買い物に出かけよう。という気になった。

ただ、買い物といっても自分のものを買うわけではない。

お中元だ。そう、お中元。お世話になっている重田さんに。

場所はどこがいいだろう。東京の大丸百貨店か、それとも池袋の西武百貨店。銀座三越なんて手もある。

しかしここ最近では普通の買い物でデパートには行かないから、そういう慣れないところでの買い物は意外と難しい。

結局子供のころから利用していて、会社にも近い新宿の小田急百貨店に決定。

今日は目先をかえて、豊洲の駅からゆりかもめに乗る。

この乗り物はまるで遊園地のアトラクションだ。

何しろ運転手も車掌もない自動運転だからだ。外の景色に見とれて窓に張り付いていると、すぐに新橋の駅に着いた。

それから、山手線に乗り換え新宿へ。やはり日曜日だけあって、平日とは道行く人の格好や表情がなんとなく柔らかに思える。

今日は天気がいい。カラッとはないが澄み切った空。晴天である。

こんな日は歩きながらコーヒを飲みたくなる。スタバのちょっと高めの甘いやつ。

エスカレーターに乗って歩道橋を渡る。下は甲州街道が走っている。要するに国道16号線。

そこから小田急デパートへの入口がある。お中元は10階の特設会場だ。エレベーターはおばちゃんや子供連れでひしめき合っていることだろうから、

あえて遅いのは承知でエスカレーターを使っていく。

エスカレーターの途中にある鏡でふと自分の姿を見る。顔が明らかに疲れている。

きつと実年齢より10歳は老けて見えるだろう。こんなんでは、彼女がいなくて当然である。いや、作ろうと思えば作れるのだろうな。大手の商社マンだからね。お金目当て。本当の愛なんてないだろうけど。

第一こんな仕事で忙しいんじゃないか。

さあついた。売り子のベテランのおばちゃんを試食品を持って、猛烈なアピールをしている。

さてさて、品物は何にするべきか。どうせ送るんだから、少しでも実用的で喜ばれるものが良いだろう。

重田さんは子供がいるからな。カルピスかな。

自分の子供のころを思い出す。お中元の季節には祖父の家によくカルピスが箱で届いたっけか？

まあその機会ぐらいしかカルピス飲めないから結構嬉しかったよ
うな覚えがある。

「よし！これだ。」

商品の見本の隣にあるカードを取ってカウンターへ。5000円也。安過ぎず高過ぎず、送料も都内は無料で、ちょうど良い値段だ。

送り先の住所等を書き込んだらすぐに家に帰る。たまには家でゆ
っくりしよう。

おっと忘れずにシャンパンを買っていこう、地下食品売り場で。
ついでに今日の夕飯の食材も。

夜景を見ながら一杯やろうじゃないか。1週間の英気を養うため
にさ。

買い物が終わると地下鉄に乗って豊洲へ。

マンションまではすぐ。エレベーターを待つ時間が結構長く感じ
られる。

やはりこの高さの高層マンションにエレベーターが2台だけという
のは少ない。

だからいざという時には使えない。

まあいいか。今日は急いでいるわけではないのだし。

部屋の前までくるとカードキーを財布から取り出し、差し込んで口ツクをはずす。

部屋に入ると電話の右端が点滅している。留守番電話である。生鮮食料品だけを急いで冷蔵庫に入れて留守番再生のボタンを押す。

「用件は1件です・・・もしもし、陣内？久しぶりです。上城です。覚えている？今日は同窓会の件で連絡しました。

お前、幹事だったよね？じゃまた。連絡くださーい・・・6月28日午前11時23分。用件は以上です。」

上城亜希？同窓会？

その2つの言葉に何か寒気のようなものを体を感じた・・・。

6、「同窓会にて」

仕事に忙殺去れて瞬く間に一週間が過ぎた。

今まで棚上げになっていた休みを使って今日は半休ということで仕事を午前中で切り上げ、約束した表参道の喫茶店に向かっている。上城とは3日前に連絡を取った。彼女も今は東京に住んでいるらしい。

早速週末に同窓会の打ち合わせを行うことにした。

そして今日が約束の日。上城は果たして現れるのだろうか。再会ができるのだろうか。

喫茶店の硝子戸を押す。

「いらつしゃいませ」店員の明るい声。

「あつ！！」

卒業写真の面影がそのまま。松任谷由美の曲じゃないけど。想像してた以上にそのまんまだ。

「やつほー」

懐かしい。上城に「やつほー」って言われるなんてなんて何十年ぶりだろうか。

座るやいなや、お冷とおしほりを持ってきた店員にエスプレッソと注文をした。

会話は何となくさなくなると予想していたが、思ったよりスムーズだった。

そしてこのあと二人で開催場所を下見をすることになった。場所は当時の予定通り、「品川プリンス」か「帝国ホテル」である。

時期は皆に連絡を取ってからおいおいに決定する。

ここまでほいほいと事が決まってくとは思ひもなかった。

それから細かい詰めなどいろいろとあつて、上城と頻繁に連絡を取るようになった。

もともと仲が良かったからまるで中学生に戻ったような気分でも楽しかった。

上城と喫茶店会議を何回か重ね、昔の友人らと連絡をとり、
ちょうど二週間後に同窓会が行われた。

一時は京都などの観光都市での開催も考えたが利便性も考えて結局最初の案どおりに東京での開催に落ち着いた。

ホテルでの食事が終わると、上城と僕は2次会に出席せずに二人で麻布十番のとある小さなバーで今日の打ち上げをやることにした。なにしろお互い仕事がある中での企画・立案・運営であったから疲れなかったはずがない。現に目に大きなクマをお互いの顔に背負っている。

二人は不思議な関係だ。小学校で同じクラスになって委員を一緒にやって時からの仲で、ひつついたり、離れたり。ケンカも何度となくしたし、お互いほかの人と付き合ったりもしていた。

それでもお互いが一番身近に感じられる友達でいると思える時間が多かった。

二人は少しカクテルを飲み過ぎていた。
すでに前の同窓会で結構アルコールはだいぶ入っている。

それにこの疲れ。お互いの内面の自分がそつと姿を表し始めた。

「陣内、お前彼女いるの？」

意外にも上城が少しばかり頬を赤らめ聞いてきた。

「いるわけないだろ、この顔で」

僕がやつれた顔で言い返す。

「ねえそんなら、付き合わない？ 私ももういい年だし・・・陣内なら使い捨てできそうだしさ。」

「おいおい、人を使い捨てカメラ扱いすんなよ。うゝん。しかしなあ。俺も仕事があればしなあ・・・上城だったらいつか。」

「えゝもつとスパツと決めてよ。男でしょ！」

そんな酔っ払い同士のやりとりで一つの合意事項が生まれた。

「試しに、付き合っちゃおうか。」

7、「官民合同プロジェクト」

「ただいまより、国土交通省主催沖縄開発官民合同シンポジウムを行います。司会は私、総務省次官鈴木優が行います。よろしくお願いたします。」

会議は物々しい雰囲気が始まった。それもそのはず。この企画は政府すなわちお国が主導の「地域再開発プロジェクト」であるからだ。

超少子高齢化時代の到来で、観光というものが大きく変貌しつつあった。

ここで大きな再開発を行わなければ時代から取り残され、都市との所得格差がより一層深刻になり、過疎化が大きく進む。

指定された地域は知床周辺、平泉周辺、飛騨高山、倉敷、鳥取砂丘周辺、沖縄の全6か所である。

今回斉藤商事が引き受けた場所は沖縄。

一時は日本の南国楽園のリゾートとしてかなりの活況であった時期もあったのだが、エネルギー大改革に伴う航空運賃の値下げおよび関税撤廃をはじめとする諸外国との規制の縮小および撤廃の流れにより、観光客の海外流失が進み、今や県内の失業率はバブル崩壊直後の東京を上回るものがあつた。

地元企業にはもはや再起の力なく、地元出身で現在国土交通大臣である岡田正治氏が中心となり国内の大手企業と組み、大規模な再開発を行うこととなつたのである。

開発の大まかな内容は返還された米軍海兵隊基地の跡地に、宿泊施設を併設した総合複合型アミューズメント・テーマパークの形成および嘉手納飛行場跡地を流用した新たな国際空港開港である。

もちろん「建設」が絡んでくれば入札等で業者が政界を通じて圧力をかけてくるのは必至であるが、政府は年金制度の破たんて予算に全く余裕がない。

そこでいったん入札制度を打ち切り、指名契約という異例の措置で、何でもお任せの日本を代表する大手商社、斉藤商事に予算上限の条件付きで発注と相成つたのだ。

この壮大な企画は新人の陣内に、初めて主務者として与えられた。

何とも重責な仕事であつた。

いくら民間企業に回された「ビジネス」であつたにしろ、これは沖縄の「明暗」を分ける大事業あることはだれの目にも明らかであり、それだけにマスコミは当然、県民の注目も非常に高い。

それに会社にとつては成功すれば沖縄での確固たる基盤は築けるし、

全体のイメージアップにつながるから社長も関心を寄せているとのことである。

失敗は万が一にも許されないであらう。

こんな、責任の塊のような仕事であるが臆した様子を全く見せず、あくまでも大成功をおさめる腹でいた。

何しろこのプロジェクトの主任となることで給与手当が月50万そして成功した暁には出世コースが待っている。

要するに、将来が非常に安定したものになる。

男の一人暮らしになぜ金がそんなにいるのか不思議だがそれにはきちんとしたわけがある。

上城亜希、そう亜希のために・・・。

会議は予定より30分ほど長引いた。

県知事やら観光課の課長やら・・・お偉い方の現地説明が長引いたからだ。

今日から当分の間、沖縄と東京を行ったり来たりすることになるだろう。

飛行機には乗りなれていない僕にとっては少し辛いかもしれない。

会社がプレミアムシートのチケットを配給してくれることを祈るばかりである。

8、「六本木の夜景」

外の空気は猛暑を完璧に掃討し終えたようにひんやりとしていた。森ビルの展望フロアから見る夜景。二人のデートでは定番だ。

それは上城の勤め先が六本木から近いせいもあるが、何より二人とも夜景を見ながらの食事が好きだからだ。

いつも店の予約を取る。一番隅っここの席。二人はいつものようにシヤンパンを開けながら、お互いの仕事の話や他愛もない話、中学校時代の想い出話をもう2時間近くもしている。

僕はこのところ東京と沖縄を往復する毎日で全く休む暇がない。それでも上城と会う約束した日だけは何とか早く仕事を片付けここ六本木に繰り出す。

割とお互い人見知りで家族以外、特に異性といると何となく変な感じを受けたものだが、

一緒にいることに何ら違和感はなかった。

僕はそんな自分の心境に運命というものをより一層感じ、より彼女との一体感を持つようになった。それは上城も同じで口にはださないが強い「絆」がお互いの心をがっちり結んでいた。

これが幸せつてもんなのかな。疲れ切った頭をゆっくりと動かしながらそつと上城の笑った姿をみてそう思っていた。やっぱり上城は、笑顔が可愛いと思う。

二人は食事を終え、表参道に向かった。もうすぐ上城の誕生日。何かプレゼントをとずっと思っていたがあいにく今日までその時間は皆無だった。

そこで二人で話し合った結果とりあえず見てからにしよう、ということになり夜の街を歩いていた。

ネオンはこの店も落ち着いていて疲れた目にやさしい。オフィ

ス街とはどこか違った空気で疲れが少しずつ抜けていくような気がした。買い物なんて久しぶり。最近では会社に泊まり込むかホテルに宿泊することが多く自宅で料理をすることもめっきり減ってしまったからだ。

ぼーとしながらぶらぶらと歩いていると、上城がいきなり手を引つ張った。

そこはある有名宝石店だった。

「これ、お揃いで買つてよ」

彼女の指が差していたものは、サファアのネックレスだった。

決して安くはないが今の僕にとっては十分手が届く金額だ。僕がブルーサファアで上城がピンクサファア。

誕生日なんだから自分だけのものにしろよと言いつづになっていたが、お揃いのものを付けるのも悪くはないと思い、そつとその言葉を胸にしまった。

会計を手早く済まし、二人は店の中で早速それぞれのネックレスを胸につけ、街頭のダイヤモンドのような白い光の中を手をつないでゆつくりと歩いて行くのであった。

9、「私情か地位か」

日が暮れるのがすっかり早くなってきた。夏にはさほど感じなかった東京と沖縄の気温の差が身をもってはつきり感じられる。体調の管理が難しい。上着を脱いだり着たりと忘れがちだが以外に重要な作業だ。

プロジェクトの具体案が固まって2か月。

新米主任は一人がむしやに、時には先輩の見えない力に助けられて、必死に仕事に向かっていた。

飛行機の機内食は数年前より格段の進歩を経て、そこらへんのレ

ストランに引けを取らない味になっている。もっぱら陣内は味を感じる気力すらなくなるほどの過酷なスケジュールだったから縁のない話ではある。

外から見る景色は美しい。自宅から見る豊洲の夜景も好きだけど最終便の飛行機から見る東京の夜景も心が落ち着く。最近はやりの「セラピー」なんかより、ずっと。

すっかり通いなれた羽田空港から本社に向かう。今日は珍しく、いや初めて社長からご指名がかかった。

一体用件は何なのだろう。プロジェクト関連だろうか。いや、それなら重田さんも一緒に呼ばれるはずだ。まったく見当がつかないあれこれ考えているうちに空港発の特急電車は新宿駅に着いてしまった。

エントランスから内線で社長秘書室につないで到着を伝える。すると直通エレベーターの扉が開く。社長の特権だ。高層の社内ビルでいつも長い待ち時間をくらっている社員にとってみればうらやましい限りである。

社内のエレベーターは最新のもので速度が速い。最上階に近い社長室まで2分足らずで到着する。

ドアが開くと長い廊下の前に出る。直進すれば社長室だ。ここは最後の研修で探検は済んでいる。

「陣内です。失礼いたします。」

少しばかり頬がこわばったのを感じた。

「はいりたまえ。」

社長からの用件とは縁談だった。相手は斉藤商事と関わりの深い大手銀行の副頭取の娘さんらしい。例の沖縄プロジェクトの成功を確信した社長は自分に相当な期待を寄せているということなのか。

なんてこった。自分には亜希がいる。結婚の話はまだしていなかったが、心のどこか遠くではいつもそれを想っていたような気がする。

しかし、会社の一社員としての立場がある。普通であれば断れない話だ。しかも世間一般から見れば決して悪い話ではないのだから、すぐに快諾できるような話ではないから、社長に「少し時間をください」というと。「回答期限は2週間だ」といわれた。

10、「氷川丸」

横浜港。そして海に面する山下公園。そこに一隻の船が係留されている。「氷川丸」である。元は国際客船で第二次世界大戦では輸送船として、そして引き揚げ船として大いに活躍したといわれる超長寿船だ。

陣内はそこに亜希を連れてきていた。そう、上城亜希。陣内は近くのホテルのレストランに予約を取っていた。「夜景」がきれいな席を。

悩んだ末の決断だった。仕事でいつもは考えられないような単純なミスを繰り返しながら。常に頭は真剣に仕事以外のことを考えていた。

会社での立場は自分の人生を大きく揺るがすほど大切なものだけれど、それを上回るようなものが今の自分にはある。亜希への強い「想い」が。

今日退社前に社長に例の件の答えを伝えてきた。つまりはこうだ。

「亜希、結婚しよう。」

それが答えだった。社長の表情はあえて見てこなかった。どうせ見たって自分の気持ちは変わらない。

「うん。」

亜希がそう小さくうなずいたのがわかった。二人はしばらく港の氷川丸をひたすら眺めた。そこには言葉で表すことができない暖かい何かがあった。

コスモワールドの大観覧車が強い光を放ちながら、二人にとって今

は無意味な時刻を伝えている。

11、「未来への道」

それからの日々は忙しかった。プロジェクトのほうは進んでいよいよ開業間近。地元の関心は高くすでに県のほうから知事が視察団が3度も来ているし、地元情報誌や新聞の取材・インタビューを嫌という程の回数受けている。

しかし、今日は午後の打ち合わせを済ませれば、明後日まで休暇をもらえる。もちろん東京に帰って亜希に会う。結婚式の打ち合わせ。一見ハードスケジュールだけれど陣内は全く疲れを感じていなかった。人間、気の持ちようとはよくいったものである。

会議は予定より早く終わり、那覇発羽田行き飛行機に飛び乗った。いつもより大分、早い時間帯だ。機内で遅すぎる昼食をとりながら束の間の睡眠を楽しんだ。

羽田空港のターミナルに着き、切符を買って京急に乗ろうとした瞬間、携帯が鳴った。

いや正確には震えた。マナーモードだもの。

ディスプレイには「上城亜希」の文字。

「もしもし、ヤス？ちよつと・・・苦しいよお・・・」

そこで電話は唐突に切れた。

一瞬の判断で陣内は空港内を走っていた。携帯をかけながら。羽田には会社の常駐の車がある。それを分捕れば亜希の家まで最速で行けるはずだ。何しろあそこは目黒の駅から遠い。電車より車のほうが早く到着できるだろう。

首都高湾岸線から都心環状線へそこから12号線へ。目黒西出口で降りた。何キロの速度を出してきたのかはわからない。しかし時計を見ると羽田からここまで30分かかっていない。相当出ていたようだ。

一般道の信号待ちの時間がもどかしい。カーナビを頼りに裏道へ

裏道へと渋滞を迂回し亜希の住むマンションの来客用駐車場に車を滑り込ませた。

5階までの階段を駆け上がり、お互い交換しておいたスベアの力でドアを開けた。

ベッドで苦しそうにしていたが陣内の顔をみて安心したのか一瞬、目だけにつこりとした。

様子を見に近づくと、亜希は人と話せるような状態ではないことが分かった。かなりの重症だ。何が直接的な原因かはわからないが呼吸が苦しそうだ。亜希は花粉症をはじめとして重度のアレルギーを背負っていて、子供のころはぜんそくもあつたと聞いていたから陣内は迷わず、新宿にある大学付属病院に車で運んだ。そこには偶然だが親友が務めている。中学時代のこれまた同級生で高校から国立高校に進学し、東大理科3類に現役で受かった切れ者で、その後は日本の内科特にアレルギー治療を代表する医師になつた狭山直哉があらかじめ電話をしておいたので病院のほうは受け入れ態勢が整っていた。

念のためすぐさま酸素マスクが付けられ精密検査が行われた。

待合室での長い時間が続いた。心配だった。それがたとえ命に別条がないものだとして予測がついていても。この世で一番大切なパートナーだから。

2時間後、看護婦に連れられて救急処置室に向かった。どうやら入院のようだ。部屋をのぞくと亜希はベッドで静かに眠っていた。薬のせいらしい。亜希の両親に真つ先に連絡しようとしたが、まずは説明を受けくださいと看護婦に制止された。

それから5分と経たないうちに狭山がやってきた。彼の顔がさえていないのがすぐにわかった。そのまま二人は個室に向かった。

席に着くや狭山が重たそうな口を開いた。

「あまり、こういうことは言いたくないのだが……素直に言わなければならん。特に夫になるであろう君には……」

「

その一言は、陣内のワイシャツに脱水前の洗濯物のように大量の水
分ならぬ汗を吸いこませた。

「上城は落ち着いたぞ。しかしなあ、精密検査の結果、近年、特に
若い女性に流行している急性咽喉ガンであることが判明した。すで
に転移していて、われわれの技術力を持つてしても手の打ちようが
ない。その部位は抗がん剤も放射線治療も効かんのだ・・・上城は・
・残念だが長く見積もっても余命は3カ月だ。すまん陣内。」

しばらくの間、陣内はその言葉の意味の片鱗も理解できなかった。
いや、理解したくもなかった。本能がそうさせた。そして理解
してないのに目から液体が大量に流出しているのがはつきりとわか
った。それは紛れもない涙だった。そして椅子から転げ落ち、その
まま泣き崩れた。「亜希。」どうして、気づいてあげられなかった
んだろう。どうして、もっと早くに見つからなかったのだろう。そ
して何よりなぜ亜希がそんな病気にかからなくてはならなかったの
か。しばらく顔をあげることができなかった。

3時間後、陣内はやっとのことで魂の抜けた体を引きずって新宿駅
に向かっていた。綾瀬から急行中の亜希の両親を迎えに行くために
場所は「サザンテラス口」。到着までまだ少し時間があつた。

涙がまだ完全には止まらない。高島屋がゆがんで見え、前を向いて
歩くこともできない。心は何も感じられない。ただ胸を不断に貫く
痛みだけを本能が感じていた。

生きるとは、信じるとは、そして愛するとは何なのだろう。亜希が
いなくなったらそれらすべてが意味をなくす。

亜希が頭の記憶の中で何回も笑っている。その記憶に呼応してやつ
とのことで陣内の体を支え、立たせていた足がガクリと折れ、陣内
は地面にうずくまってしまった。

しばらくして不意に亜希の声がしたようなきがして、ふと顔をあげ
ると、そこにはビルの間を縫って精一杯日没まで輝く夕暮れの太陽

の姿があつた。まるで亜希の笑顔のような明るい光を放つ太陽が。
サザンテラスの夕焼けはただ無言で陣内の目から噴き出す涙を、光
ある限り、照らし続けたのであつた。

（終）

この小説はフィクションです。実在の団体、人物等とは一切関わり
ありません。

（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ご意見感想などお気づきの点ありましたらどんなことでも結構ですので、

コメントお願いいたします。

読んでいただきどうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9775c/>

サザンテラスで夕焼けを。

2011年1月11日03時19分発行